

化学産業のメッカ早くから環境志向 寝屋川（大阪市）

| | |
|-----|---|
| 著者 | 大西 正曹 |
| 雑誌名 | 日本経済新聞 まちかど羅針盤 |
| 発行年 | 1998-10-13 |
| 権利 | (C)日本経済新聞社 このデータは、日本経済新聞社の許諾を得て作成しており、無断での複写・転載は禁じられています。 |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/7275 |

まちかと羅針盤

98.10.13 日経新聞

● 化学産業のメッカ早くから環境志向 寝屋川（大阪市）

「野崎参りはやかたふねでまいる……」の歌で有名な寝屋川は、江戸時代から明治にかけての中河内・北河内と大阪の市街地を結ぶ重要な水路の一つである。その中間地点に位置する今福地域は地の利があり、交通、物資の要衝として発展してきた。

この地域は江戸時代、毎年多くの洪水による被害に見舞われていた。しかし、寝屋川水系の改修や運河の開削と土地区画整理事業推進がこの地域を産業拠点として見直させることとなった。

寝屋川の水運は船便に適し、さらに工業用水として利用可能であったため、多量の水を要する油脂化学、ガラス工場など多くの会社が立地したと城東区史は記している。区史に名前のある荒川林産化学工業（現・荒川化学工業）、奥野製薬工業、牛乳石鹼共進社、天満サブ化工、アサヒペンなどは現在も事業を続けている。

その後、これらの化学工場の集積地が関西の化学産業のメッカとして位置付けられる。ここから、工業立国日本を支えた各種の化学工業製品が生み出されてきた。

荒川林産化学工業は明治九年（一八七六年）に生薬商として創業し、大正三年（一九一四年）にロジン（松ヤニ）、テレピン油の製造拠点として鳴野工場、さらに事業拡大に伴って今福工場（大阪工場）を昭和十一年（一九三六年）に設置した。

発足当初から地球に優しい素材の開発を理念としており、早くから再生可能なロジン、代替 coron など環境問題に真正面から取り組んだ。

現代の企業は、地球環境保護という命題を二十一世紀に向けた生き残り策として謀せられている。

だが、水も空気も今よりはるかにきれいだった当時に、なぜ環境志向の経営に思い至ったのか。先人の先見の明には驚かざるを得ない。

（関西大学教授 大西正曹）